

2021年度

K 3—2

国 語

2月25日(木)

人文社会科学部 (経済学科)

16 : 25 ~ 17 : 15

【前期日程】

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(1枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあけない。
- ・改行したら一マスあける。
- ・句読点等の記号はそれぞれ一マスとする。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は一マスで使う。

- 6 問題は、声を出して読むてはいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章は、佐伯啓思著『経済成長主義への訣別』^{けつべつ}から一部を抜粋したものである。文章を読んで問題に答えなさい。(配点四〇%)

私は、経済成長主義への異議を申し立ててみたいと思う。いうまでもなく、経済成長こそは、今日、われわれを捉えて離さないもつとも強力な価値観のひとつであろう。あまりに当然のことになってしまい、わざわざその重要性など説くものもほとんどいないほどである。

とはいえ、新聞は日々、景気の動向や成長率の上昇下降について紙面をさき、時には、それが政権を揺さぶることもある。政府に対するもつともわかりやすい批判は、この政権では経済はよくなるらない、というもので、一方、受けて立つ政府の側も、景気を回復し力強く成長させることこそが支持率につながるかと考えている。選挙となれば、与党も野党も、景気回復と経済成長を公約の筆頭に掲げるし、大新聞などのメディアも、景気指標が悪くなったり成長率が低下したりすれば、ここぞとばかりに政府批判を行う。

経済学者や経済評論家そして経済系のジャーナリズムもいうまでもなく「成長主義」に与している。ある経済政策を批判する場合にも、その政策では成長できない、というのが通例だろう。もつとも、最近、事情は少し複雑になり、経済格差の拡大が今日の経済問題の最大テーマのひとつになってきた。そこで、成長よりも所得再分配を優先すべきと説く経済学者もでてくる。しかし、これは経済成長そのものへの異議というよりも、その修正というべきだろう。成長(効率性)と配分(公正性)の間のバランスという問題は別に新しいテーマではなく、経済学にずっとつきまといてきた課題なのである。

それに対して、私は、「脱・成長主義」というものを論じてみたい。それは、第一に、今日、われわれはもはや経済成長を生み出せる状況ではなくなりつつある、と考えるからであり、第二に、それにもかかわらず経済成長を第一義的な価値とする「成長主義」は、われわれにとって、もはや幸福を約束するものではないと考えるからである。

この場合、より重要なのは後者の方である。「経済成長」という事実よりも、「成長主義」という価値もしくは考え方の方である。余計な誤解を避けておきたいので、あらかじめ述べておくが、私は、何が何でも「経済成長をやめる」などというつもりはない。別に経済成長を目的にしているわけではない。

確かに、私は、今日の世界経済、とりわけ日本経済は、少なくとも中長期的にみて、もはやそこそこの成長率(たとえば数年にわたり平均して2%程度の成長)さえ達成できる状態ではない、と考えている。せいぜい1%もいけばよいだろうと思う。人口減少社会なら0%でも一人当たりのGDPは成長する。しかし、私は別に計量的に推測したわけでもなく、特別な根拠があるわけでもない。だからそのことを争うつもりはない。

問題はむしろ、さして根拠もない推測や予測に基づいて日本経済はもつとも成長できるのだの、3%成長を目指すべきだ、などという無責任な言説があまりに多すぎる点にこそある。そうした成長待望論者に限って、脱成長という悲観論などケシカラン、という。その気になればできる、あらかじめあきらめるのは敗北主義だ、というわけだ。

私が本書で問題としたいのは、現にそこそこの成長が可能なのか、それともほぼゼロの低成長路線に入るか、ということではなく、この成長至上主義の思考そのものなのである。日本の成長率が何%になった、さあ大変だ、あるいは、成長率があがった、日本は復活した、とばかりに一喜一憂する種類の成長主義とは訣別したいと思う。

それは、ただ私の個人的な願望や嗜好というだけではない。われわれは、統計的数値として示される経済成長率に何か大きな意味があると考え、その数値をもち上げなければ気が済まなくなっている。そして、あたかも血圧計の測定結果が体の健康を示すかのように、成長率の数値の上下だけが、われわれの幸せの尺度であるかのように思ってしまった。血圧とは逆に、この数値が年々あがっていかなければ、何か生活が豊かになり、幸せになれるかのようになりがち不安になってしまう。

だけれども少し考えてみよう。自動車を一台買うことで幸せを感じることもあれば、一人の信頼できる友人を作ってこの人物とゆったり話をするに幸せを感じることもある。ある程度の生活レベルが達成されると、たいていの人は、後者の方により魅力を感じるだろう。だがそれではGDPは増えない。自動車を購入すればささやかではあるが経済成長には貢献する。成長と幸福感が一致しないのはあたりまえなのである。

にもかかわらず、いつのまにか、可能な限り大きな成長を達成することこそが望ましい、という成長信仰からわれわれは抜け出せなくなった。そしてそのことは、一人の友人を見つけるよりも一台の自動車を買う方をよしとする社会へとわれわれを誘導してゆく。大事なことは、これはひとつの価値観だということなのである。個人の嗜好や選択の話ではないのだ。経済成長をめざす社会とは、一人の友人とゆつくりとおしゃべりを楽しむ「無為な」時間よりも、せつせと働いて収入のレベルを上げ、高級な自動車を購入することにより高い価値をおく社会なのである。こうした社会では、「無為」であることは不道徳になる。有用性と効率性が支配的な価値になる。こうしてわれわれは、活動は常に有用性をもたなければならず、非効率であることは悪であるかのような社会へと押し込められてゆくだろう。

しかし、いったいそこにとどのような合理的な理由があるのだろうか。われわれは何のために経済成長を求め続けるのか、その先に何があるのだろうか。こう問うても確かで納得のゆく答えはどこからもでてこないであろう。それなのに、われわれは見事なまでに成長幻想もしくは成長主義に囚われている。きわめて長い人類の歴史のなかで、物的な意味でこれほど豊かになり、そして、これほど高度に個人的な自由を享受している時代はない。にもかかわらず、今日われわれは、いつその豊かさや自由とを求めあげくに成長主義に捕捉され、たいへんに窮屈な経済の論理の中に収監されている。

これは、近代社会の合理的な選択の結果などというものではなく、理性的な判断の帰結などというものでも決してない。成長主義とはひとつの明確なイデオロギーというより、輪郭のはつきりしない共有された感情であり気分といった方がよい。それは、輪郭はいまいであるが、その核にはきわめて強固な情緒をもった気分なのだ。昨日よりは今日の方がよくなる、今日より明日はもっとよくなる。いや、よくなってはならない、という規範的な願望を含んだ気分である。

近代社会にはいつて、われわれは時間というものをそういう風に見るようになった。未だ来たらず、という未来への不安を、希望というあいまいな情緒を信じることで克服しようとしたのである。明日が今日と同一状態ではまだ不安なのだ。それほど、近代に生きるわれわれは未来を確かなものとして信じることができなくなってしまう。だからこそ、未来は、今日よりもよくなければならない、という強迫観念に囚われてしまうのであろう。しかもそこに「進歩」という言葉を当てはめるとい念の入れようである。モノが増えるという物象的形態はよりよい社会の物証的事実となった。かくて経済成長とは社会進歩のもっともわかりやすい指標におさまった。富が少ないよりも多い方がよいと無条件に信じることができれば、経済成長が「進歩」であることは論をまたない。こういう了解ができたのである。

繰り返すが、ここには何の合理的理由も確実な根拠もない。それはほんの少し考えてみればわかることだ。なぜなら、富を生み出すためには、それなりの犠牲を払わなければならない。無償で贈与される富は太陽の熱と大地の恵みぐらいである。富は空から降ってくるものではない。とすれば、この犠牲と富を比較しなければ、実際には富の増大が進歩を意味するかどうかはわからないであろう。ところが、富の方はともかく、犠牲の方は、簡単には計測できないし、そもそも何を犠牲と考えるのか、どこまでを犠牲と考えるのか、あらかじめ決まった基準はどこにもない。ということは、富の増大をそのまま「進歩」とみなす理由はどこにもないということになる。成長主義とはただの情緒、気分といわざるをえないのである。

この点で、フランスの思想家であるジャン・ピエール・デュピュイが面白い話を述べている。アメリカのイェール大学の法学講義では、定期的に、次のような例が議論されているそうである。ある国の大統領のもとへある者がやってきて、次のような取引をもちだした。「貴国の経済は調子が悪いですな。私が立て直して見せましょう。そのために最新技術をお譲りしましょう。するとGDPはいつきに2倍になりますぞ。ただその代わりに、貴国の人口から毎年2万人の命をもらいたいのですがね」

これを聞いた大統領はうろたえ、申し出を拒否した。拒否するのが当然であろう。彼が拒否した最新技術の発明とは、自動車のことである……。〔『経済の未来』以文社〕

私が「経済成長主義」に強い疑問を感じるのは、まさに、これと同様のことが「成長主義」のもとでは生じうると考えるからだ。いや、「生じうる」などという控えめな言い方は、かえって事実を欺くことになりかねない。日常的に生じている、というべきだろう。先の、一人の友人と一台の自動車を考えてもよい。高級車を一台手に入れるためにあくせく働けば、一人の友人と過ごす無為な時間は確保できないだろう。それは高級車を手に入れるための犠牲であるが、この犠牲の方はまったく目にはみえず計測もされない。確かに自動車のたえざる発明・改善によってGDPは増加してゆく。しかし自動車事故による人口の減少はカウントされないし、まして、環境の悪化やわれわれの生活のあわたたしさからくるストレスなどまったくカウントされない。それで果たして「進歩」といえるのか。われわれの幸福につながったなどといえるのだろうか。

〔出典 佐伯啓思著『経済成長主義への訣別』新潮社、二〇一七年、一三〜一九頁。ただし、常用漢字以外を含む単語にはルビを付けた。また、本文中には『経済の未来』以文社も引用されている。〕

問一 傍線部B「無為な」という語について、著者はどのように理解しているのか。本文に即して八〇字以内で説明しなさい。(配点一〇%)

問二 傍線部A『経済成長を第一義的な価値とする「成長主義」は、われわれにとって、もはや幸福を約束するものではない』とあるが、それはなぜか。本文中の具体例を用いて、著者の考えを四〇〇字以上五〇〇字以内で説明しなさい。(配点三〇%)